緑のまきば

2008 No.41

小金井緑町教会
小金井市緑町四―一六―三三
電話 〇四二―三八一―七九六一
牧師 山畑 謙

説教

『戸をたたかれて』

山畑 謙

「キリストの言葉が
あなたがたの内に
豊かに宿るようにしなさい。」
（コロサイ三章一六節）

二〇〇八年度の聖句として、この御言葉が与えられました。改めてこの御言葉に注目してみますと、「言葉」が「宿る」という、少し奇妙な表現があります。言葉を「使う」とか、「獲得する」とか、「蓄える」というのなら分かります。しかし、「宿る」というとき、それはモノではなく、本来は人が宿るということでありましょう。ここで言われている「キリストの言葉」は、道具として私たちが使ったり獲得するものではなく、命ある人格的な存在で、その故に「宿る」と言われています。それは「私」がいかに「キリストの言葉」を自分の人生に役立てるために使うか、獲得するかという生き方とは、正反対のものであることを表しています。「宿るようにしなさい」とは、自分の家に大切なお客様をお迎えするように、キリストの言葉によって、イエス・キリストを私たちの内にお迎えしなさいということでしょう。自分が主人になって(偉くなって)使うとか獲得するというのではなく、お迎えする方こそ大切な偉いお方であるから、その方のために仕えようとするのです。そのような仕える心をもって、そこで心の扉を広く開けて、心の中の部屋もできるだけきれいに整えて、お迎えし宿っていただこうとしなさいと言われています。

それは茶の湯に似ています。茶席に客人を迎える時、庭の草花を整え、水を打ち、茶室もきれいにし、掛け軸もお客様を思って選び、お料理もお客様を思って献立を考えて備え、身を整えてお迎えするものです。大切な人を自分の住まいにお迎えするもてなしの姿です。そのようにして、キリストをお迎えしたいものです。しかし、それは理想でしかないと言われるかもしれません。確かに私たちの内面は、様々なものやゴミがちらかって、足の踏み場もない家のようではないでしょうか。いろいろな事に思い煩い、多くの呟きや悪口や非難や不平という騒音とゴミで満ちてしまっていることがほとんどではないでしょうか。

W・H・ハント作の「世の光」という聖画があります。おそらくキリスト教に関わる人の多くにとって馴染みのある絵で、世界で多く複製されている聖画の一つです。手に灯りを持ち、戸を叩く主イエスの姿が描かれています。その戸には取っ手が描かれていません。それは中からしか開けられないもので、ヨハネの黙示録に「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をするであろう。」(三・二〇)と言われているように、主は戸が開けられるのを待っておられる方なのだと示されます。

振り返ってみますと、とても戸を開けて主をお迎えできるような自分ではありません。実は、それが分かるだけまだ幸いかもしれません。そこまで主に戸を叩かれて、気付きを与えられてきたからです。そこで部屋がきれいになったら開けようというのでは、いつまでたっても開けることはできないでしょう。戸の向こうで戸を叩いて「わたしだ。恐れるな」と呼ばれる声に耳を傾けましょう。主をお迎えし、キリストの言葉(救い)を宿す時にこそ、汚れはてたこの身が聖なるものとされ、新しく造りかえられるのです。仕える者とされ、友を、隣り人をその住まいに、その心に迎え入れるように変えられるでしょう。大きな幸せがそこに備えられています。